

京都大学	博士(文学)	氏名	加藤 希理子
論文題目	エックハルトにおける神と人間の関係性 —— natura 概念の二義性を手がかりに		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>エックハルトは、人間の自然本性を二義的に捉え、人間の最内奥の始原においては、神の本性と人間の自然本性は共に在るが、現状においては、両者の間には断絶が存在するとしている。本論文は、彼が、いかにして人間がそうした断絶を超克すると考えたかという点に焦点を当て、神と人間の関係性をどのように捉えたのかを考察したものである。</p> <p>第1章では、エックハルトにおいて「始原」が単なる時間的な始めとしてではなく、あらゆる事物の存在の根拠として捉えられていることに着目し、そうした始原の本質が明らかにされるとともに、始原と事物がいかなる関係にあるかが示される。その際、ディートリッヒの本質的原因論と比較しながらエックハルトの始原論が考察される。エックハルトは、始原を神と同定し、始原と始原によって生じたものの関係として、一義的關係とアナログア的關係を挙げている。一義的關係は、父なる神と子なる神に適用される。両者は、父の全本質と固有性が子に注がれているということにおいて全き一である。始原と始原から生じたものに一義的關係を適用するのは、ディートリッヒと異なる点である。これに対してアナログア的關係すなわち始原と被造物の関係においては、後者は前者に比してより劣った、不完全なものであるとされる。そこにおいて、始原は、それによって生じたものがそれ自身においてあるよりも卓越した仕方、自己の内により先にある、それは始原の内在に限り始原と等しい、すなわち始原と一義的關係にあるという。被造物は始原において、流出する以前は、理念、子として、始原と共に、始原と同等の仕方であるとされる。</p> <p>エックハルトは、言葉を創造の範型として捉える。エックハルトにおいて、神は自己を認識し、存在しており、自己を認識する際、自己自身としてロゴス、言葉、つまり子が発出する。神はロゴスを介して自己を認識し、存在する。神はまた、自己を認識するなかで、他者を同時に認識する。神は自己の内にある万有のアイデアを認識し、アイデアを範型としてすべての被造物を創造する。したがって、アイデアは認識の原理であるとともに、創造の原理、範型でもある。エックハルトはアイデアとそれに基づいて創造された事物をそれぞれ、永遠に神の内にとどまる言葉、神の外へと語り出された言葉と捉え、両者は神においては一であるとする。言葉は事物として外へ発出するが、その後もアイデアとして神の内にとどまる。アイデアと被造物は始原においては一なる言葉である。始原においては一なる理念が子、言葉として現存している。しかし、始原において一であったアイデアは、始原の外へと降下する際、多へと分裂する。一なるイ</p>			

デアは、魂の最内奥に隠されて在り、人間とイデアの間には、断絶が存在するという。こうした事態は、「内在にして超越」と表現される。

第2章では、アナロギア論を手がかりに神と被造物の関係が存在論的観点から考察される。まずエックハルトは、存在概念を文脈に応じて「神的」、「被造的」という二種類の意味で用いており、神と被造物に一義的に「存在」を帰属させることがないことを明らかにする。彼は、被造物が神的な「潜勢的存在」と被造的な「形相的存在」を「二重の存在」として有しているとする。つまり被造物は「潜勢的存在」を神の内に「形相的存在」を自らの形相の内に持つ。これら神的な存在と被造的な存在は、まったく同じでもなく、全く異なってもおらず、両者はアナロギア的關係にあるとされる。そしてアナロギア的關係にあるものは、「一つの同一の事物の様態の違い」によって区別されるとし、その「様態の違い」は前後の様態の違い、すなわち原因と結果という因果的な前後関係として規定される。存在は神の内に原因としてより先の仕方であり、被造物の内には結果としてより後の仕方である。被造物はそれ自身の内に存在の原因を持たず、神の内にある存在から自らの存在を受け取る。この前後関係によって両存在は峻別される。しかし、被造物は神の内に自らの存在の根拠を有するのだから、発生論的には、すなわち帰属においては、両存在は同一である。被造物は、それ自体では存在を欠く無であるがゆえに、たえず神の内の存在を受けとり、それを借用することによって存在し、一瞬でも神と切り離されるならばそれは無にすぎない。そして、エックハルトは、それ自体では無である被造物が存在するということは、神が実在し、被造物に存在を与えているからであるとして、被造物の現在が神の実在を表示すると解する。彼のアナロギア論は、神と被造物の存在論的差異と同時に帰属における一を強調するのである。さらに、トマスの存在概念との比較によってエックハルトの存在論の独自性が明らかにされる。まず両者は、神においては、存在と本質が同一であるのに対し、被造物の存在は神から「原因」された存在であり、被造物は継続的に神から存在を受け取ることによって存在する点で一致する。しかし、両者は被造物に固有の存在を認めるか否かという点で異なる。トマスが被造物に不完全ながらも自存性を認めているのに対し、エックハルトは被造物に全く自存性を認めず、被造物による存在の所有を明確に否定する。エックハルトの存在論の特性は、神中心主義と被造物の神に対する絶対的依存性をトマス以上に徹底させたことにあるといえる。被造物は、神から賦与される存在を通して自らの根拠と空虚性を認識せねばならないこととする。

第3章では、すでに考察された始原論および存在論との密接な連関において、エックハルトの認識論を考察する。彼は、「多」から脱却し、「一」へと還帰することが至福であり、「一」への還帰は、知性認識によって可能になるとしている。こうしたエックハルトの思惟の背景には、彼が属したドミニコ会の伝統における主知主義があると考えられる。本章では、エックハルトの認識論の思想史的背景について考察した後、

彼が神認識と神化の関係についてどのように論じているかを解きほぐし、彼の認識論の独自の点を明らかにしている。

エックハルトは、トマスに倣って、感覺的認識から出発し、能動知性が可感的表象から、普遍的な可知的形象を抽象し、受動知性がそれを受け取ることによって知性認識が成立するとする。しかし、エックハルトでは、人間知性における形象は、「粗雑なもの」とみなされ、形象によって成立せしめられた知性認識は、「像を介した認識」と呼ばれ、超克すべきものとして捉えられている。知性認識は、「ものと知性の一致」、認識するものと認識されるものの一一致であり、トマスにおいては、両者を一致せしむるのが認識形象であった。その場合、認識形象は、対象の類似として、「知性における真」であるが、エックハルトは、この形象を真とはみなさず、むしろ認識を妨げ、虚偽をもたらすものとみなす。对象的認識は、被造物としての人間に固有の有限な認識とされるのである。

エックハルトは、人間が被造的知性から超出し、神的知性へと参与することが「自然本性的に」可能になると考えている。神においては、自己と対象、すなわち知性と知性認識されるものは全く同一であり、神は、対象も、形象も、自己として、自己の内に有している。したがって、神においては、対象と形象の間にはいかなる齟齬もないから、神的知性の内の形象は常に真である。知性と対象との一致から真としての形象が生まれるのであり、この真としての形象は、子なる神そのものであるとされる。そして、魂におけるすべての形象が除去されたところに、神の知性が人間の知性に付加され、神が認識形相となり、我々人間の知性と一になる。神は、すべてのものを、自己を認識するのと同じ様態で認識するのであり、人間の魂が「神の子」へと造り変えられることは、神の自己認識の内に参入することを意味するのである。それは、人間の魂が、神的知性の内で自己について認識することであり、魂は、神が自己を認識するまさに同じ様態で神を自己として認識するとされる。自己認識を介した神との一という考えは、エックハルトの認識論の独自の点である。

第4章では、エックハルトにおける非被造的ないし神的知性の倫理的な特性に着目し、知性的本性と悪の関係について考察する。エックハルトは、悪が、自然の必然性ないし神の欠陥ではなく、人間の意志に帰されるべきであるとする。彼は、人間が共通性の欠如、すなわち神以外のすべてのものを意志することを、「私的な善」を意志することであるとし、「私的な善」を意志することこそ悪を意志することであるとする。

こうした考え方の背景には、エックハルトの傲慢に関する解釈があると考えられる。彼によれば、「自分から為すすべてのものは傲慢であり」、傲慢こそが罪の根源である。「自分から為す」とは、共通性の欠如、無に基づいて立てられた自己から行為することを意味する。こうした「私を私として立てること」から「私にとって善きこと」を志向する「私的な善への愛」が発現するのだとされる。人間は、私的善を求める被造的な意志から自由になり、自己の傷ついた自然本性を超越して、神と一つに在る自然

本性を回復せねばならないとされ、それを論じるに際して重要となるのが、受肉論、キリスト論である。

イエス・キリストにおいて、神の本性と人間の自然本性は合一しているが、そうした自然本性を、人間は本来有していたとされる。イエス・キリストはいわば人間が神の子となり得るといふ神化の範例であって、われわれはイエス・キリストに倣い、被造的な自然本性を超えて神との一致へ赴くことを求められるのである。しかし、エックハルトによれば、こうした自然本性からの超出は、人間自らの努力によっては為されえず、人間に出来ることは、罪の主体である自己、個を捨て去ることが出来るよう祈るのみである。この自己否定が、謙遜であり、「善の選択」であるという。「善を選択する」とは、神からの恩寵の働きかけに対して受動に徹することであり、そこにおいて「私が私である」という自己同一性が解体される。人間は、自己を無化するところでのみ、神との「共同」が可能となり、神と一つに在る自然本性が回復され、「神の子」として再生する。人間がこうした受動へと駆り立てられるのは、ただ神の無償の神愛、恩寵との直面によってのみであるとされる。

第5章では、第4章での恩寵と神愛に関する言及を受けて、神愛の性格についてより詳細な考察がなされる。まずエックハルトにおける愛の秩序について主題的に論じられる。愛の秩序とは、神への愛、自己愛、隣人愛という三つの愛の間の順序を指す。エックハルトは、神への愛について、自己にとって善きものとして神を愛するのではなく、善を善ゆえに愛する友愛的な愛を説く。彼は、アリストテレスの友愛概念を、父なる神と、子なる神(神の子)となった人間との間に成立する神愛へと変容せしめ、神愛において、神への愛と自己への愛は同一となるのである。こうした神愛において、同時に隣人への愛、そして自己への愛も真に可能となる。エックハルトは、「心を尽くした神への愛」が、自己愛と隣人愛の尺度であると明確に述べる。彼によれば、「自分のものを求めない」ことが、神への愛と隣人への愛に共通して妥当するのであり、さらには、「自分のものを求めない」ところで真の自己への愛も成立する。彼は、神への愛と隣人への愛と自己への愛の同等性を主張する。

エックハルトの愛論は、「一」の概念と関わっている。神と自己が一つに在るところでは、隣人もまた神と一つに在り、それゆえ自己と隣人も一つに在る。「自己のものを求めず」神を愛することとは、他者と分離された特定性を持った自己が善を享受することを求めないことでもあり、それは、「一」において一切を同等に愛することである。ここから「一」においては、段階も秩序もなく、『心を尽くして』神を愛する人は、必然的に、『自己自身と同じく隣人をも』愛する」とされる。人間は、「一」において自己と隣人を同時に、同等に、換言すれば無差別に、愛することが可能となるのである。欲望の主体から脱却し、一性に基づいて自己を捉えるとき、自己を愛することが同時にすべての人間を愛することであるという新たな主体性が現出するのである。

エックハルトは、神愛を、父なる神と子なる神の結合としての聖霊であると捉えて

いるが、同時に、トマスに倣って、神愛をわれわれの内に注腑される「注賦的徳」であるとも捉えている。トマスは、神愛を精神の内に住まう聖霊そのものであるとみなしたロンバルドゥスを批判し、神愛は内的根原でなければならず、被造的な習慣としての徳でなければならないとした。そこで、エックハルトにおいて、いかにして聖霊である神愛が、善き行為がそこから為されるどころの「内的根原」としての徳でありうるのかという問題が、「内在」の意味を問うことを通して考察されることになる。彼において、「内在」とは、神と人間が本性において一致していることであり、「内的働き」とは、父なる神が、魂の内に神的生命を生み出す働きを指す。これに対して、「外的働き」は、神が本性において異なるものとして人間を存在せしむる働きに相当する。外的な働きから内的な働きへと変容する過程が、「恩寵としての神愛」であり、人間が子となると、「聖霊としての神愛」は、人間の本性と同等のものとして人間に帰属する。恩寵としての愛と聖霊としての愛は段階的に捉えられ、後者がより高次の「完全な愛」であり、この愛によって、われわれは父と一つに結ばれるのだというのがエックハルトの考え方である。さらに、彼が、神愛から生きる「神の友」が、現実に生きる人間の在り方としては、いかなる形をとるとみなしていたのかが考察される。彼は、「神の友」を、一切の区別が撥無され、神も含め一切が生じる以前の究極的な「場」である「一なる神の根底」に立つ者であるとする。エックハルトによれば、「神の友」の在り方とは、「外に立つと同時に内に立つ」、換言すれば、「時間の内の働き」を為し、多くの事柄に関わりつつも、それによって永遠性から切り離されることなく、自己に囚われず、自己を捨て去りつつ生きる在り方なのである。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、マイスター・エックハルトにおける神と人間の関係性をめぐる思惟を自然本性(natura)という概念を手掛かりにして明らかにしようとしたものである。エックハルトは一方で、神と人間の魂との近さを強調し、「神と魂の近さとは両者の区別も見出せないほどのものである」と述べるが、他方で、神と人間とが断絶していることを説き、すべての被造物が無であることを力説している。論者はこの相対立する神と人間の関係を、エックハルトにおける人間の自然本性概念の二義性から説明できると考える。この人間の自然本性という問題系に視座を据えて、エックハルトの思想全体を読み解くということが、本論文の企図である。

本論文の宗教哲学的意義は以下の点に要約される。

第一に、エックハルトの自然本性が被造的な自然本性と非被造的な自然本性という二義性をもつことを明らかにして、最内奥においては神の本性と人間の自然本性とは共にあり、現状においては両者の間には断絶が存在する、という人間の二重のあり方をさまざまな角度から炙り出した点である。そこから浮かび上がったのは、「無」に基づく自己を超出せしめられることによって神と等しい「本質的な」姿へ変容するという人間の自然本性のダイナミズムである。この変容を自然本性の本来的な自己実現として捉えることによって、エックハルトの思想の特質がまさにそのダイナミズムにあること、そして、被造的な自然本性が、神と被造物へと分離する以前の一なる「神性の無」まで至るといふ、ダイナミズムの振幅の大きさこそ、エックハルトの思惟を比喩なきものにしてしていることを、論者は鮮明に取り出した。それによって、エックハルトの思索の独自性が明確に示されることになった。

第二に、エックハルトにおける神と人間の関係のダイナミックなあり方の多様な面を明らかにし、彼の思想全体をその関係の多様性の表現として読み解いた点である。第1章では、神と人間は、始原と始原から降下したものとして、アナログア的關係が取り出される。つまり始原から降下したものは始原に比してより劣ったもの、より小なるものであるが、始原から発出する以前は理念として始原と共に、始原と同等の仕方であるとされる。第2章では、神と被造物のアナログア的關係が、存在論的観点から論じられる。つまり神的な存在と被造的な存在は、原因と結果という因果的関係として峻別されるが、両存在は発生論的には同一であることが示される。第3章では、被造的知性による認識は形象によって成立するものとして有限なものであるが、人間の魂におけるすべての形象が除去されるなら、神の知性が人間の知性に付加されることが可能になると述べられる。第4章では、人間の被造的意志は私的善を求める意志として悪を意志するものであるが、恩寵との直面によって自己を無化して「神の子」として再生することができるとされる。第5章では、人間が欲望の主体から脱却して、神と自己が一つに在るところでは、自己と隣人との無区別な愛が可能になるといふことが提示される。論者によるこれらの丁寧な描出は読み応えがあり、論者の企

図がもたらした豊穡な成果である。

第三に、エックハルトのラテン語著作の論考をトマス・アクィナスやディートリッヒの論述と比較してその相違点と共通点を綿密に検討し、さらにはアリストテレスや新プラトン主義、アウグスティヌスの思想からエックハルトが何を受け継ぎ、何を改変したかを、詳細に論じている点である。それによってエックハルトの思想史的な位置づけが明らかにされると共に、エックハルトの思想がどのような影響下で形成されてきたかが浮き彫りにされることになった。このような思想史的研究は近年のエックハルト研究において大きく進展した側面であり、現時点ではこの側面を無視してエックハルト研究は成り立たないといってよい。その意味ではこの側面はエックハルトの宗教哲学的考察の前提となるものである。論者はこの面で十分な力量を示しており、その緻密な論考が本論文の学術的水準を支えて、エックハルトの思索の独自性を取り出す考察を説得力あるものになっている。

第四に、エックハルトはラテン語著作とドイツ語説教という二種類のテキストを残しているが、論者は両者の統合的解釈を試みているという点である。ラテン語著作は、パリ大学でマイスターの称号を受けて講義を行った、ドミニコ会の指導的地位に立つ神学者としてのエックハルトの思索の成果であり、ドイツ語説教は、救済の事柄について自由にかつ大胆に人々の魂に語りかける説教者としてのエックハルトの語りであり、両者は異質の性格をもっている。キリスト教神秘主義の最高峰というエックハルトへの評価は主に後者に基づいてなされてきたが、この両者をエックハルトの思索の深みにおいて統合する仕方で解釈することが求められている。それはきわめて困難なことであるが、論者は果敢にその困難に立ち向かっている。

残念ながらその統合的解釈の試みは完全に成功しているとは言い難い。それは、創造という始原からの発出と原罪という始原からの落下との関係が、本論文で十分に明らかにされていないことに一因がある。始原論的ないし存在論的な意味での被造物の発出と、自由な意志による被造的存在への落下とは、位相を異にする事象であるが、そもそもエックハルトの叙述のなかにこの異なる位相が含まれているため、それを統合するには解釈者の視座が明確に提示される必要がある。本論文ではそれだけの強力な視座が打ち立てられるに至っていない。また統合的解釈の意図に関して、自明の事柄であるかのように説明が省略されている点があることは問題である。しかしながらこの異なる位相の統合について、論者が明らかにした人間の自然本性という概念のダイナミズムによって、ある種の見取り図が描かれている。この見取り図はエックハルト解釈をさらに深化させる大きな可能性を秘めている。その意味では論者の挑戦は成功への予感に満ちており、本論文は統合的解釈に一つの強力な足場を築いたものであると評価できる。今後の研究の進展がおおいに期待される。

これらの宗教哲学的意義によって、本論文はエックハルトの深遠な思想の全体像を豊かに描き出した魅力あふれる論考となっている。惜しむらくは、筆が走っていくぶ

ん粗雑な叙述が見られる箇所がある。また論者が最も重点を置いている第5章の考察が、第1章から第3章までの考察と十分に有機的な連関をもっていないきらいがある。しかし、こうした瑕疵も本論文の意義を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2011年4月5日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。